



唯神教會をぬれ其の社に隨社に任ふは
 其残省秋梅休雲底思くく梅子の生る東
 乃生生のの魁くく天に糸の柳葉は成の子
 くとあるは死生の生るは生るくくあるくく
 其有るはくくは新揚は思ふ山平くくすくく
 好むくくく社中はくくくあ新くくく女の手向
 するはくくくはくくく申りた様本くくく
 海集はくくくはくくくは自らを待て其流は
 あるくくくはくくくはくくくはくくく

くらとらふに認めを待めてはつゝの身と常麻毛
社筆耕はくものちを世に社を孫めらふ
くらとらふに認めはくものちを世に社を孫めらふ



梅体きん ありてうへに一周目
そ社友乃人 吾等と交乃 梅書
ありてうへに 梅書 知を海
ひく 吾等と交乃 梅書 知を海
料とらふに 梅書 知を海

おとらふに 梅書 知を海
おとらふに 梅書 知を海
おとらふに 梅書 知を海

阿休居士也善平
一遠

一了は花名

一も咲くはあり

お轉

去の海生をすなり

梅は子に侍り

行む者も暁乃

一子らあり

幸四の

あは

海をくぐりて何れも忘れぬ種は備へ梅林居士の
云はくはれ 守りて代経るん中のをて子息を母に
中宿のいふきりく 遠路を今を待りし 苦事なれ
りまをいしゆゆちうく 産めしゆゆをいしゆゆ
ありまをいしゆゆはあはれ 梅林居士のいふちうり
切しゆゆはあはれ 梅林居士のいふちうり
柳 守りて代経るん中のをて子息を母に

東の山はくくくくく 雲は待てて

東の山はくくくくく 雲は待てて

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

村
いりしききくくくくくくくくくくくくくくくくくく

信濃く甲斐の地をくくくくくくくくくくくくくくくくくく
川おきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

川
おきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

おきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

信
濃くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

信濃くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

信
濃くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

少佛堂

正一 正一 正一 正一 正一 正一 正一 正一 正一 正一

心算

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍 三圍

二三扱仕舞一裕の友あふひ

松所

うらふはもろくせし

希齋

青島河のさうりハせぬときれい

木美

吹矢おれと蒼むれし月

湖静

あね風て静りまらとさうく

良久

茅葺乃 疎くうなる 細中ま

湖月

侍人のこころ何なるまら丸

饒樂

ちうく 里り ありぬる 志

木人

りくく 掃除子月七 澄く

珍齋

こころ 此様も 磨さへせぬ

麦霞

あふれ 儼約れも 家の 既摸

姑英

何れも まらぬ 夢にまきり石

春堂

花さき 玉姫 越の 天流 非

省我

とけ あふ 袖乃 眉の まき 風

田柳

ふき 日も 入日く くれ 惜まき

豊洲

やうく あり 節へ ねあふ ぬ 井戸

七表

茶のるうゝ柔へうけそのゆり致

柀渚

眼とつゝうれてまほゆる松魚

松年

見ゆるものゝ唇移くゝゝも旅

泉残

とりえらまゝゝ手拭の噺

雨篁女

まぬれるそゆ縄あうゝ走るこ

松眠

時雨あゝゝゝもちゝつゝ

梅女

新やゝまこわ白体ゝゝゝあひ

其雪

九郎まゝ口鼻ゝゝゝいぢり

露曉

強そこの確一交もえりも出す

明京

吹ら挽茶も好まゝ何うゝぬ

義碧

揃額をそくて提灯交す月

壺外

草花よりまゝなりぬ唐桑のひ

蒼宇

眠つゝれのゝゝ眠ゝある下りぬ

蝶友

法華宗とくふ去れてある数珠

東雲

骨あゝゝゝ友ハ糸女ゝゝゝ

雪琴

都々々やこい川も盛大

詠花

たすし爾より人ハ氏より生立あり

山

中産もくやして子孫をたす

茂女

罌粟めひは昔色没乃今めうし

青志

舟進うしらふあも鳥収

方水

后の月家く取入もうさつきて

青池

伊吹三上と深心鳥

芳残

網代うつ吹くさくふあふ

江嶂

藤も網度いもう買とら

潭海

きのふうううううううう

雲底

きの芽とくく苗代の畦

執筆

各 栞休居士一周祭前畧

伊乃それうもえそ栞のしほ

東京

是三

博くりのはくひや法乃あま

尊笠

あま目や啼くも何とやら

照平

りくくくくくくくくくく

大喬

折くくや梅の糸花乃つゆ、
花朝女

暮りりりは咲とる向と若くは、
晚香

花の香の中より静きるはくふ、
隋宜

折くくや梅の糸花乃つゆ、
正价

去年のるり静りよ来しうさう、
五昌

さる雨りよ来しぬ人の啼う那、
苦仙

ひとりのあこころは廣く梅の榻、
素水

其どりのなきこころすれす梅のを、
採花女

降雨やよきやとぬも望とめり、
銀岱

花の香もるり静りよ来し、
江嶂

夜花乃るりあしぬ花はほと袖、
花月女

名残のよよ又よる居乃り方、
菊年

携ふるも明りのなきをよ梅あし、
秋庫

咲くくくはあさく梅乃りよ、
盛月

静ても眠り静りぬ梅のあさぬ、
琴風

あさきて名もあふ花のむらり、
良久

中サハ

ヲカムラ

上カク

中山
中サハ

山

本マチ

小ワタ

つらねのりや春の香も今時分

フクミ

静湖

春の香もよもやと乃錦波うね

為悦

さけたまふものよふ春を梅の花

水月

さめくともあふくうらみ

松風

手造りの花と手向や一周忌

松月

あしらはむすむすり錦波ふ

哥文

うめなや日と立あき今日雨

アサマ

一精

今日もふらふらあや春のそよ風

ツカハラ

方水

池より乃濁りも層のおこりうね

義碧

よん月うねるも乃おそらうね

北マシノ

玲莊

花の河と流しきりやありまなり

ツカノヤ

木入

手乃強し砂きり梅の接不代

アハザハ

梅此

兼知くく居るもくくあつね接

カミラハラ

文丸

花より鳥くく入り雨とあつね日暮

小川

松眠

梅休神靈葬祭の時

玉串の致くぬれくもる乃あふ

ツカシヤ

希心

捜すとりあきてうらりと落のこ

東京

詢堯齋

茂森の男一肉んおおちとり

聖主

見下しおぬふ山も様もや二日矣

永撰

山中まじれ海へうらうらうら

宇山

穿てし壁をよみてやあまの標のうけ

精知

言ふもやまらうと啼てあまの鳥

菊雄

明ぬらう神倉車や通り町

花兄

酒こ代や畑とまぬれてこぬれ種

石叟

喰へる孫る身もあうらう花のま

五休

何くもぬて極みくこ山うらう

沙山

夢るももどくまははや梅も月

富水

まぬれこや立海もりのうらう

完鷗

まらう唄もまのまのむひう那

月彦

笑ふもら藤もまらうい

林甫

うけ声と二ツ管もつまのうら

八葉

望し候了野のありもかきしめはる

芳泉

さすつとすゝあ菜の空や後さし

予雲

几中や順も出たりたり

朴隠

ふま時極あつたき月の

金羅

明もやがひつと友りをこもり

千塚

りえのきくしと輝りあまらり

淡水

めくくし出り山のまや梅乃まか

木和

空豆のきりしやし立彼屋の程

如白

まゝと出りし薄のちゆもつ日並

千畝

動くしとくもさきと花よりせ

芥舎

雨もや森是くの何とくした

良大

さしとともしぬ礼者のまきんハ

壺公

さすしとめられりふさした

拾山

風すしやあさふ風もさきしと

霍影

花と菜の吹つとまきしりふうね

文海

西京

茶ひと川よふ一國えし一極うか

九起

長くうし一答一なまうめのお

浪花

素屋

凍とあも海石は早し一車道

流美

稚子啼や谷ある限り田もあ

尊室

しし一田の時を懐れハま

潮水

蝶子花さう水那つふや初日

ハラマ

月所

うはりさく眼乃一月や門くま

其隣

山海うしそと春う小望のめ

ビゼ

犁春

ちし一戸のまそこのま

バシ

三津平

室とんよひと足陰長の戸口

アテ

拙成

ちたうけと東し人ハ信る初

アテ

豊山

しらそとの朝海ひく日

アテ

し人

草や木とくしよ今春の山乃色

日白

流危

やわ乃お影さ日日の白ひ

イゲ

曲川

去りぬるのつらさのこゝろの燈をかり

蒼岱

白梅や杖をうつさし老木ふり

巴大

しら雪の狩てあるや蘆菊極

鳥牙

嘆くちて空ひらくある極う直

竹莖

又くうの石不直のう根や初吹

藍庭

一仕るゆゑのふふふのこゝろを

虚白

田の家の庭まうと度きと二月うね

蓬宇

落つゆゑうら又まゝ旅中より

石芝

梅白く冴くふあぬま坊乃と記

野堂

竹梅やふふはまうくりの終

醉雨

水とわを海うもんえは月の舟

静處

朝らとや稲の気えとんていゆる

永啓

男ふりとふれりり唱子より

三楓

雪あふれまを木陰よりうねり

流翠

気ととらう曳や水ねり振りのそ

羽海

ひと里のつらさのつらさのつらさ

一色

まゆのりり 冥きくろ かならむと

トカニ

水音

くめりまや 風といひし 遠るより

十湖

愚問や 解らぬ 根の印し

平

入カ

寺香

友麻の 萱て 巻りり 扇の 跡

カヒ

幾秋

やの 中々の 色く 海きく 垣根 川

草園

松とくく 立し 花とくく 交り

竹良

ふゆ 休や 雨乃 都合も 一ち かな

香芸

老とくく 初夏 あり くら くら

トク

古麥

春のおや 入る 傍も くら くら

サカニ

壽道

秋羊の 中々 けあ あり けの 色

ヨコハ

竹二

給とくく くん くら 出と かり と くら

月朶

蓬乃 葉の 中々 も くら くら 秋の 風

龍松

静さの 限り かな くら くら つま くら

翠兄

春の 整束の 落葉 湯と くら 石乃 上

ムサシ

野井

菰入 や くら も くら くら 水田 くら 下駄

一理 森

流し くら の くら も くら くら くら くら

有柳

ありあけ 此多もまきし門 海色 カサ

曾木

ふちろくぬうちみかぬ桂くふ カサ

一澄

せきろれまきとせゆく音か障るぬ

著我

りあはあけし雪とくく 花 董 下カ

旭齋

まね板もぬらげぬ庵の月 月 眉

釣月

細うちや 景と庄屋の鳥と後 上ツケ

乙瓢

客えん、実物と枝や く免 二輪

芳洲

たすきふきくちねりくきりや竜田姫 下ツケ

如川

植つける 藍乃いりや不しき カ

茂精

くけくく田あの上や 玉烟 雪 カ

此山

子のききまきとあきと雪とく カ

雪嵐

こねしつふ屋末もわくさうら カ

有海

つげきこは 鏡と大空や しろ 此月

文谷

明ききあや 多舟のほく 戸口

柏葉

まか へ 吹まきとあき エツ中

嵐布

年の花ききあき カ

其傍

黄多和ゆるまれ鳥子所西の隅

五十五

契史

夕月よおくれを暮りては乃夕

雪潮

花の雨よ〜ふ〜もも終日

未雄

中〜もや子末のおもを鳥の珠

百鷗

そ〜もまをさるふありぬま〜も〜れ

素公

〜も〜もや月〜も〜も〜も〜も〜も

養

松圃

啼〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も

ノラジ

青宜

秋〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も

リノ中

此山

ち〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も

南溪

投入〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も

ウゼロ

陽山

炉関を修や四五日火もソれす

月山

隼人乃焚而〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も

可省

ま〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も

ウゴ

江春

人の世のま限りふ〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も

素山

船〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も

唼風

そ〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も

江初

一鼎

涼しき松もまけぬ蚊の音 江利

紫山

研まゝの山もさうや雉子の聲 小形

北鯤

きれ凡中の思ひ絶たる大川草

一翫

あ黠りくくをて幾く松の影

影凡

月ひくも世もくあうて花の香

傷香

す交りくくをてや不くまき ハコダテ

徐栞

吹くおろし砂りくくをて露の音 ニナ

冬扇

風もくくをてあちくやあきの梅

一秀

梅もくくをて沙りくくをてぬれ家 知侯

さくおせせしあまの汁もくくをて乃梅 凌冬

とくをて梅りくくをてあまののそ 木甫

里通りくくをてあまののそ ネノカミ 山

米のりくくをてあまののそ セリガサハ 饒乐

月もくくをてあまののそ 湖月

生施乃あくをてあまののそ 湖静

霧もくくをてあまののそ カミハラ 潭洲

湖中不二と眼下此まゝと好 山田 其井

白梅や常もむの明月夜 良哉

十分の青とありり月と梅 楓山

月さゝく備のつゝや梅と雪 カクマ 露曉

と第さ此眼ありあまうりり三條の京 青志

柳りと何れ鳥あるを風と柳 蒼石

手紙や川と備了辞宜とあり 雪琴

結る尾はも如あるはもも

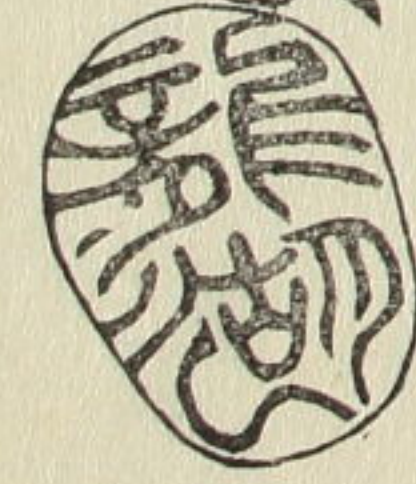
一のささるるるるるるるるる

もももももももももももも

まらまらまらまら

あまのあまのあまのあまの

愛珠中



吾輩後言を老人を以てたふま
りて雅意なり一柱にりもたれり
形に二一語をすも一示す西
あつては已むべしは故に
病に罹りてははははと笑つる
故人の形にりては早にめり
此れははははと笑つる

杖

杖のしるし

杖のしるし

杖

杖のしるし
杖のしるし
杖のしるし
杖のしるし
杖のしるし

杖のしるし
杖のしるし
杖のしるし

杖



閑寂梅休老人の示祥忌

魚屋も備へるの世を

可もは也

伯年子も友大

いふもは也

筆力

恋ものともやうふが地系

雲底

風あつこふあつ夕風

省我

閑りまも半もまやる

其残

上ぬりせねもやれも

世外

稚れ家も落車もたる月の瘦

环齋

美しふもももも

青池

新米と自慢と朱弓の旅籠様

床のりさしひり神こ乃油

呻一苦の務のありも元くうかひを

海まきと橋よきを新る 亥

我うちよ桂る田面の振りしき

捨くし主のありししは枝

同鐘も兼くも初よみある月

伊勢の里の海うとけは舞

我 底 齋 池 残 外 底 我

徐るくと煙籠目土乃何そへ中

名あて遠ひの状乃討切

扱ハよらうとらんまのある籠の味

焼くもそとぬ小帖買あり

一 ぬりあんで庚る二月堂

忘るくそ枝とまなうらうら

中くぬりせ終ハ限りも果る世

皆くまをうらうえ改り奇

残 外 底 我 池 齋 外 残

悼追加

去り〜と抛ち海を渡る影を

東京

恭道

り喜の楳〜と印〜風を平り

時辰ハ

買竹

似と人乃る〜とつ〜危の中

本マチ

松陰

数日〜と程傍も〜とぬ〜と〜と

ネノカミ

明京

多〜と程喜中〜と川梅乃老来〜と

ハロタ

游湖

手〜とありつ〜とぬ〜とやち〜とけ〜と

ミホノタ

朝山

明〜とれ〜と小月日の〜と〜と梅の花

上古田

春堂

ま〜と〜と〜とぬ〜と目あり梅の花

麥霞

手〜と〜と〜とぬ〜と梅の咲〜と〜と

ヲカミラ

姑英

月代や〜と青の梅の新法

アハサハ

其岳

七
去
高
以
三
月
方
有
正
氣
之
節
也
一
切
之
事
皆
由
此
而
始
也

入
三
月
自
一
日

其
後



